



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	水と農業経営
Author(s)	井上, 実
Citation	季刊農業経営研究, 3, 8-9
Issue Date	1958-02-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/36251
Type	departmental bulletin paper
File Information	3_8-9.pdf



くに小豆、菜豆類は価格変動の幅の最も大きな農産物である。豆類の統制が撤廃されてから、価格の調節のため取引所が設置されたが、かえって、取引所が投機のために利用されているという非難がある。豆類に海外輸入に依存するもの多く、輸入の如何が価格に強い影響を与えているので、価格変動を防ぐため輸入調整ははかられている。最近、主要農産物の価格調整のため農産物価格安定法が發布されたが、その効果については、いろいろ問題がある。

(2) 取引機構の整備

④ 統制品である米の取引上の合理化は、輸送、貯蔵、保険金利などの取引にともなう費用の外は集荷、配給の手数料にとどめようとする傾向にある。取引はすべて政府の委託の形式をとり、政府の監督等の費用をはずくと、取引費用は小売価格の15%前後である。戦前の費用21.3%と比較するのは無理があるけれども、一般に取引費用低減のための努力がはらわれているといえよう。

⑤ 豆類などの自由商品は、最近協同組合の出荷が活潑で、出荷の費用は低下している。ただ、協同組合も系統の段階が多いこと、配給機構には協同組合が参加できないこと、投機にからむ費用などがあつて、現在は小売価格に対し取引費用は20～30%である。

⑥ 果実の取引費用は75%、蔬菜は70%位であるが、腐敗性のつよい農産物であるので取引費用の多い理由がある。自治統制の種子馬鈴薯の取引費用35%

は集荷、配給まで協同組合が参加し、価格が安定しているという事情が前提となつているためであろうか、しかし、このことから取引費用低減のための機構の整備の必要が果物や蔬菜にあるように思われる。

一般的にいつて、北海道における取引機構の改善は協同組合の整備発展と密接な関係にある。(北海道大学講師)

水と農業経営

井 上 実

水の供給状態は世界の農業を大きく左右している。とりわけ欧米の畑作中心農業と、東洋の水田ないし灌漑中心の農業とは対照的である。農業経営学は資本主義経済の早く発達した前者の体内から生れたが、これが普遍性を持つ限り、後者に対しても妥当しなければならない。然るに後者はその包蔵する前時代的な不合理の故に、国民経済、農業経営の発展が停滞的であつた。このような環境の中において、わが国はいち早く欧米農学を取入れ、これをモンスーン農業に適用した。中でも北海道が最も積極的に欧米農法を取入れた。明治の人々は北海道に欧米式農業経営を夢みた。現実的には府県農業化の傾向が著しいとしても、北海道農業が欧米農法を基本としていることは、今も変りない。かくてわが国はその体内に近代農法を移入した。即ち北海道を媒介として、アジアとヨーロッパとの、両つの農法

が対置されたといえよう。

ところが、水田稲作に代表される府県農業も、裏作の普及、次いで多毛作化は、水稻早晚期栽培、田畑輪換等を頂点として、水稻1作一畑2～3作等となり一種の畑作化傾向を示していることが注目されなければならない。府県農業に見られるこのような多角化は、灌漑農業と非灌漑農業の統合であり、又北海道においては畑作農業から、水田農業への移行が見られる。近年水稻反収における東北海道の躍進と西日本の停滞が注目されているが、これは如上の傾向から、東北部と西南部とにおける作物選択の際の、水稻の比重の差異としても理解せられる。かくてわが国に移植された欧米農法は水田にも波及し、風土や経済構造の中に馴化されつつ、日本農業の近代的集約化の契機となつた。

さて畑作農業も水田ないし灌漑農業も、作物は水を要求する。今日前者における土壌水分の調湿が重視され、その極は畑地灌漑となつている。然し水田ないし灌漑農業は一定の水利秩序を持つところに重要な特色と拘束とがある。水利方式が一度定式化されると、それは水の広汎な流過性に因つて支配力を持ち、慣行となつて継承され、従つて生産力停滞の原因となる。これを打破するには水利施設の革新を要する場合が多い。

即ち古い不合理は水利慣行が取水、分水、排水等を包括する新しい土地改良に伴つて、改善された事例は各所に見られる。殊に最近の大規模水利事業の実施

は土地改良区の民主化と共に水利秩序の近代化を促進している。然し現在の国家投資の窮屈さから見れば、今後計画的な農民蓄積の自主的活動に俟つ範囲が広いと思われる。

水利関係の合理化は、灌排水や土地利用の自由化、従つて経営の受容力ないし生産力の増大とスパイラルの関係に立っている。即ち明治以来の土地改良、乾田馬耕、動力揚排水等々の諸施策の累積に次いで、今や刈取機の実用化も近きを予想させるほど機械化の濃度を高めて来た。このような水の制御と労働の節約とが経営の合理化や多角化を可能ならしめ、この可能性が又水利の改善を促進している。而してわが国のおかれている環境は、先づ経営の集約化を指向させるけれども、これを如何に能率化するかは、残された問題となる。そこに経営規模ないし作業単位拡大の実験が日程に上るべき必要が生じてくる。

如上のことは単に水田農業においてのみならず、今日やかましい畑作問題においても、灌漑はもとよりその他農耕上、水の問題まで掘下げて解決すべき場面が多い。かくて田畑を通ずる経営の近代化は、程度の差こそあれ、水を血脉とする一連の關係に繋がっている。このような水の問題の経営の場における合理的解決によつて、わが国農業の発展とその世界史的意義の発揚が期待されるであろう。

(農林省農業技術研究所経営第三課長)

適 期

金 沢 夏 樹

最近の農業の動きの一つに、農業経営の個別化の傾向がある。この個別化は、例えば旧い部落の種々な結合組織が、生産力が高まるにつれて、次第にくづれていくことから勿論うかがうことが出来るが、然し、新らしいかたちで形成されていた共同作業、共同利用なども、次第にくづれていく傾向にあるといえる。農業機械の共同利用のくづれは、最近、最も著しい傾向の一つと思うが、機械利用台数の増大とともに、それがくづれ、個別所有のかたちに進んでいると思はれる。

旧い部落の結合組織が除々にくづれてゆくのは勿論よろこばしい。然し、生産手段の利用の共同、殊に動力農機具等の利用の共同が、個別利用ないし個別所有に進むことは、大いに問題がある。農機具が次第に小型化して来たことは、この個別化の一表現であろう。

ところで、一方農業技術の進歩普及は著しいものがある。殊に稲作地帯での技術は、反収を著るしく安定かつ上昇させ、8俵などという反収は最早平年作の下という程度の地域も多い。農民の稲作技術を見ると、それなりにかなり科学的となり計量的になつて、肥料も、養分換算で答えてくれる。同時に、

農民はどの作業についても適期をいう。従前の農民の適期の概念は田植やせいぜい播種の時期についてのみ、みられたかと思う。然し、現在では、耕起も代掻きも、除草も、消毒も、追肥も、すべて適期をいう様になつた。しかしこうして技術の進歩普及は、適期を、従来よりも一層巾のせまいものとして意識されてきている。

稲作の絶対的の最大を求める限りで、技術の進歩は、ますます適期を巾せまく要求することにならう。

技術の進歩とともに、普及した農機具が、次第に個別化して来たことは、この様な適期の巾の考え方に根強く影響されていると思う。農民は、ひとしく同じ適期をさげび、同じ作業方式のもとに次第に小型の個別所有化に移る。東北、北陸の稲作地帯の著るしい一傾向であらう。

本来農業経営の発展の基本態度は、その自由度をひろげることである。殊に稲作地帯の課題の一つは、水田の高度利用をすすめることであらう。絶対的の適期の精密さは、今のところ、生産力を著るしく高めてはいるがこの事が、融通のきかぬ個別化のために、種々の方向に発展すべき農業経営のうごきを阻止する作用とならない努力をなすべきである。適期は、相対的であるとともに、経営的であつてほしい。

(東大農学部助教授)